

生因子をターゲットにした治療法についても検討していきたい。

#### PA-9.

##### 食道癌に対する腔内照射併用放射線療法

(放射線医学)

○佐谷健一郎, 兼坂直人, 臼井千晴, 平林省二,  
横内順一, 阿部公彦

【目的】当院では食道癌の根治的放射線治療に際し、可能な限り腔内照射を併用してきた。1998 年 11 月  $^{192}\text{Ir}$ -HDR 導入後は線量評価点を粘膜下 5 mm として照射しているが、それ以前は  $^{60}\text{Co}$  を用い粘膜表面を評価点としていた。今回我々は  $^{60}\text{Co}$  を用いて治療した症例を中心に治療成績、障害およびそれに関与する因子等について検討した。

【対象】1989 年 12 月から 1999 年 12 月までに当院において腔内照射を併用し根治的放射線治療を完遂した 52 例を対象にした。男女比は 44:8。年齢は 47~93 歳 (中央値 71 歳)。組織型は扁平上皮癌 51 例、腺癌 1 例。

進行病期分類は UICC 分類にて stage Ib 5 例, stage II 6 例, stage III 25 例, stage IVa 16 例であった。

【方法】LinacX 線 6 ないし 10 MV にて外照射 40~60 Gy/20~30 回/4~6 週照射後、直径 20 mm のバルーン付きアプリーケーターを用い腔内照射にて 3~6 Gy/回, 1~2 回/週, 計 6~20 Gy 照射し総線量 60~70 Gy 照射した。生存率は Kaplan-Meier 法を用い、検定には Logrank 検定を用いた。

【結果】全症例の 2 年累積生存率は 35.1% であった。粘膜表面を評価点とした症例において腫瘍長径 5 cm 以上と 5 cm 未満の間に累積生存率に有意差を認めた。晩期有害事象は 52 例中 9 例に認め、内訳は食道潰瘍 5 例, 食道狭窄 5 例, 食道気管支瘻 2 例であった。

#### PA-10.

##### 癌における E-カドヘリンの異常と発育形式、腹膜播種との関係

(外科学第三)

○伊藤一成, 粕谷和彦, 須藤日出男, 若菜洋一,  
片柳 創, 佐々木啓成, 岡田佳平, 鈴木敬二,  
高木 融, 鈴木和信, 青木達哉, 小柳泰久

【背景】癌の転移には主病巣から癌塊の離脱が必要であり癌細胞の接着因子に異常が生じていることが明らかとなっている。E-カドヘリンの機能低下は細胞の浸潤能に関与するとされ、また E-カドヘリン遺伝子のメチル化により E-カドヘリンの発現が不活化することが知られている。胃底腺粘膜を発生母地とする胃癌は発生より single cell 化してびまん浸潤型に発育増殖する、いわゆる scirrhous type の胃癌であり、腹膜播種にて転移再発する傾向がある。胃癌における接着因子の機能異常と病理組織学的因子、遠隔転移との関連性を検索し、さらに E-カドヘリンの異常が癌の発育過程のどの時期に起こるのか検討した。

【方法】胃癌 46 症例に対し E-カドヘリン、 $\alpha$ -、 $\beta$ -カテニンについて免疫染色を施行した。また 38 例に hot start による Methylation specific polymelase chain reaction を施行し E-カドヘリンのメチル化を検討した。検定は、 $p < 0.05$  で有意差ありとした。

【結果】低分化型癌、びまん浸潤型癌、深達度が深い癌、腫瘍径が大きな癌ほど有意に E-カドヘリンの発現低下がみられた。全例にメチル化の発現が少なからず認められた。腫瘍サイズが大きな癌、腫瘍の占拠部位が L 領域より U 領域の症例においてメチル化陽性の頻度が有意に高かった。腹膜再発症例は有意に E-カドヘリンの発現低下、メチル化陽性がみられた。

【結語】E-カドヘリン蛋白やメチル化は、浸潤性発育に関わっておりこの変化は癌の発育増殖にともなっており腹膜播種の成立に深く関連していることが示された。